

「墓石よりも学びの舎を」

【結論】

政治的な時間に流されることのない真摯な議論を、流域委員会の委員のみなさま、国や県にお勤めの河川技術者のみなさまの双方に望みます。

言葉や数字に惑わされず、「本当に必要な情報は何か」を見極め、得るための努力を惜しまないで下さい。私も出来る限りの協力をさせていただきます。

生まれ来る子どもたちと私たちが、ほんとうの安心と幸せを得るために。

【想い】

日本人は、木を育てて家を建ててきました。

100 年を耐える家をつくるために、100 年先を見越して木を植えてきました。

その、100 年先を見据えたまなざしと労が、この国に住む万人の暮らしを支えてきたと言っても過言ではないでしょう。

私の住む余呉町は、淀川の河口からもっとも遠い位置にある、源流。かつて都へと文化をもたらした渡来人が日本海を経てやってきた、日本文化の源流でもあります。

私はこの地に住んで、この地が持っているさまざまな力を感じています。

日々変わり行く空気・風景、暮らしをとりまく多様な生き物たち、連綿と受け継がれてきた歴史・村の景色。この数十年にわたって吹きすさんだ、人格のない冷たい経済活動によって、この地の山も川も荒らされてはきたものの、まだ、この地には再生する力がじゅうぶん残っている。そう確信しています。

語弊があることを恐れずに申せば、数十年前、この地に降りかかったダムの中核計画というのは、合法的な援助交際の申し出だったと思っています。

なぜならば当時の建設省の決定というのは絶対的で覆らないものだったからです。そして当時の経済は競争こそ絶対の、人格のない、冷たい経済だったからです。自らの足で立つことをあきらめざるを得なかった住民に、国や県は巨額のお金と設備を用意し、依存関係をつくりました。

国や県の手厚い保護を受けることで、住民の誇りは深く傷つけられました。

私はこれまで、ダム建設に取り組んでくださってきた技術者の方々とダム建設に協力をされてきた移転地域住民の方々、特に地元の意見をまとめる立場にあった方々に、心からの尊敬と謝意を抱いています。技術者の方々は、自分とはまったく関係のなかった土地に飛び込み、そこに住む人々との信頼関係を築き、川を知ろうとし、そしてダムの建設を通じて答えを示そうとされてきた。移転された住民の代表の方々は、住民のさまざまな思いが交錯し、ぶつかりあう中で、一人一人に心を砕き、共に歩む道を模索された。

それぞれに、苦しい道を歩まれた。当事者にしかわからない苦難の道を。

しかし今、経済は二極分化しようとしています。

既存の流れのまま、無秩序なグローバル化を突っ走る経済の一方で、人格と温かみのある経済が生まれつつあります。みんながナンバーワンを競うのではなく、一人一人の人間、一つ一つの地域がオンリーワンを見出す経済。

この、後者の経済に向けて流域全体が移行していくことが、今私たちの目の前にあるさまざまな流域の問題を解決していく鍵であり、これまで多くの方が味わってきた苦汁を昇華させる鍵であると信じています。

都市部と農村部との健全な関係、上下流の対話、組織を超えた対話・・・。

すでにその動きは、この地でも始まっています。

もしこのまま、情に流され、政治的時間に流され、現段階での議論の状態でダム建設の結論が出されるとなれば、それは、地元住民の誇りと、連綿と受け継がれてきた地域の歴史への墓石です。

新しい経済に目を開いて、一人一人の可能性、一つ一つの地域の可能性にまなざしをあててください。

100年先を見てください。

それが、流域委員会のみなさまと、河川技術者のみなさまへ向けた、私からの願いです。

私にはささやかな夢があります。

いずれあの丹生の谷が地元にかえってくることがあるならば、僕はあの地に、学びの舎をつくりたいのです。多くの人々と共に、痛んだ山や川の再生に取り組みながら、山を学び、川を学び、人を学び、生きることの意味を識ることができるような場を。

時代の中で数奇な運命をたどったこの地だからこそ、伝えられることがあると思うから。

さいごに、今、私の心にしみている一遍のうたを付して、私の意見といたします。

お読みいただき、ありがとうございました。

『生まれ来る子供たちのために』

多くの過ちを僕もしたように
愛するこの国も戻れない もう戻れない
あのひとがそのたびに許してきたように
僕はこの国の明日をまた想う

ひろい空よ僕らは今どこにいる
頼るもの何もない

あの頃へ帰りたい

ひろい空よ僕らは今どこにいる

- 生まれ来る子供たちのために何を語ろう -

何を語ろう

君よ 愛するひとを守り給え

大きく手を広げて

子供たちを抱き給え

ひとりまたひとり 友は集まるだろう

ひとりまたひとり ひとりまたひとり

真白な帆を上げて

旅立つ船に乗り

力の続く限り

ふたりでも漕いでゆく

その力を与え給え

勇気を与え給え

作詞・作曲：小田和正